

靴底は布製？

「パリの冬は厳しい寒さなのに…」

出発前、南フランスにしようかパリにしようかと迷い迷って、生活の拠点をパリに選んだときに多くの人から、半ばあきれたような声を聞いた。しかし、恐怖にさえ思っていたパリの冬は、日本の我が家の我が居室の、夏は完全暖房、冬は完全冷房とほうってかわって、寒さをそれほど感じない。「昨年も暖冬でした。今年はこれからが寒いのかもかもしれません。」とはフランスで知り合った知人の話だが、いっこうに「これからが寒い」のに出会わない。このまま春を迎えるのだろうか。だから、寒さで困ることはないのだが、しょぼしょぼとよく降る雨には困ることが多い生活が続いていた。

一時帰国の折り、一足の靴を履き続けていては靴のためにもよくない、季節も変わることだし、冬場にふさわしい靴をと、下足箱の奥の方にしまい込んであった靴を引っ張り出して、それでパリの冬場をしのごうと考えた。あちこち痛んではいるけれど、靴底はすり減っておらず、靴クリームを塗ったところ、傷が目だなくなり、新品とは言えないが「華のパリ」にふさわしいものになったと、自画自賛。いつ買ったのか、いつからしまい込んであるのか、そんなことさえ思え出せないほどの代物なのであるのが、多少気にはかかっていたが。

さあ残りのパリ生活を充実したものにするぞと、それまでアパートマンに閉じこもりがちだった身を、連日、あちこちに運ぶ。日本の東京よりはるかに北にあるパリ。日本の大雪情報を耳にすると、さあ、パリはいつ雪が降るのだろうかとか構えていたのが、さあ、今日も小雨が降るのだろうか、という心構えばかりになっている昨今。毎日のように降る小雨に、濡れはじめた石畳の美しさに惹かれ、アパートマンの窓から覗く空模様を眺めて雨音が聞こえはじめると、さっそく外出し、あちこちの石畳を探し求める。ほんの少しだけ顔を見せている石畳はアパートマンの近くにもあるが、情景はやはり、石畳が奥ゆかしく雨を跳ね返す情緒を醸し出してくれない。できれば、車があまり通らず、石畳の歴史を感じさせてくれるようなところがいいと、自然と、足があちこちに向いていってしまう。

ぼくのお気に入りの石畳の情景は、マレ地区にある歴史図書館の中庭である。石と石との間を、緑の苔が埋めている。赤茶、黒、白等々さまざまな色が雨に打たれて浮かびあがっている石畳を、緑の色が囲んでいる、そしてそれがまた小雨に映えている。布のキャンパスには描ききれない自然の色の調和とはこういうものをいうのだろう。小雨ならではの

情景ではある。一点から時間をかけて眺めるときもあれば、あちこちと場所を変え、目線の高さを変えて見つめるときもある。雨が石に吸い込んでいくように見えるときもあれば、まるで鏡のように石を照り出すように見えるときもある。自然とは、どうして、これほどに動的なのだろう、多彩なのだろう。

しばらく小雨に濡れながら佇んでいると、また始まる。足裏が水に濡れてくる。しかも両足裏である。すっかり冷え込んでクシャメも出てくる。屋内に移動し、いちおう図書館内であることもあり、本を借り出し、せっせとノートに書き取る。それに退屈すると、外に出て石畳を見る。またまた冷えてくる…。その繰り返し。

歴史図書館の石畳情景に魅入られて、数週間をそうやって過ごしていた。

しかし、ぼくの履いている靴底は、布製なのだろうか。

小学校中学年頃までは冬場は母の実家で作っていた、いわゆる自家製のわら草履を履いていた。中学年を過ぎる頃は市販のゴム草履に替わっていた。それでも、雨が降ったり少しばかりの雪が降ったりすると足裏はびしょぬれになる。しもやけには悩まされたけれど、「いいとこの子」たちが靴を履いていても、しもやけの痛み、痒さを訴えていたから、わら草履やゴム草履のせいでしもやけになっているとは思ひもしなかった。だから、子どもの頃は、雨が降ると足裏が濡れて気持ち悪いものだ、と思いこんで生活をしていた。しかし、そういう生活はもう半世紀近く前のこと。ぼくの以降の生活では、大雨のときに足が濡れるということしかなかったわけだから、今になって、しかもパリの生活で、雨が降ると足裏が濡れて気持ち悪い、冷たい、体が冷える、という生活を再現するというのも、よく考えれば異常なことのはずである。しかしぼくは、「この靴底は布製なのだろうか？」と思う程度で、靴を買い換えなければいけない、という気持ちはさほど強くは起こってこなかった。

人間の欲望というのは果てしない。図書館で本をノートに写すという行為よりも、石畳が雨に濡れる情景を飽くなく楽しみたい、しかし足裏が濡れなければもっと楽しめるはず、という願いの実現の方に向かっていく。布製の靴底だとしたら、靴と足との間に水をさえぎるものを敷くのがいいかと思い、それを買い求めるためにと、靴を手にしてあれこれ確かめることにした。ぼくの足はなかなか異形であるらしく、これまで買い求めた靴は、そのほとんどが縫い目が破けたり、ニカワが剥がれて靴底がべろっとなるが多かった。けれども手にした靴はそういうこともなく、なかなかしっかりとした作りである。履いていてもきわめて快適である、雨さえ降らなければ。

ついでに「布製の靴底」を見てみた。折り曲げてみると、前部分の半ばのところ、横にパカッと二つに割れた。両足ともそうである。なんだ、布製ではなくて、靴底が割れていて、そこから水が入ってきていたのだ。事実が分かるとばかばかしい。それどころか、一瞬にして「買い換えなければ」という気持ちが強く湧いてくる。

パリはちょうどバーゲンセール真っ最中。ぼくには縁がない光景だと思っていたけれど、思いがけなくその光景の一員となることができる光栄に浴した。もちろんぼくには、ブランドものが安く手にはいるからというバーゲン熱ではなく、近所の小さな小さな靴屋さんで、あまり愛想の良くない店員が目線に追われながらの買い物であったけれど。知ったこと。フランスの靴屋に展示してあるのは片方だけであること、サイズ表示がぼくにはよく分からない数字であったこと。ぼくの買ったのは43という数字が書かれてあった。42で試したらきつかった、44で試したらブカブカだった、だとしたら43がちょうどいいのだろうと思って買うことを決めたのだが、どうも大きすぎる。指から先がうーんと空いている。歩いているとかかかとが脱げてくる。紐をきつく縛って足が抜けるのを防いだが、痛くてたまらない。考えに考えて、足の先の方に古靴下をつめてみた。快適である。

さあ、これで、雨に濡れる石畳を思う存分楽しむことができるようになった。その分、本を借り出しノートに書き写すという作業時間が間違いなく減ってしまうこと、歴史図書館の中庭だけではなく、他の自然的調和の石畳を探し求めて歩き回る時間が確実に増えることになったわけである。

パリ生活もあと2ヶ月。新しいぼくと古いぼくとの出会いは、これからどれほど待ち受けているのだろうか。今日も雨模様。新しい靴の出番である。(2001年1月)